



素通りしていた東京駅

一週間の東京旅①

早いもので、もうあす送られて来た。その中から師走。月日の流れは「東京駅開業百年記念」年齢とともに加速するよの本があった。

うな気がする。後期高齢者となり、体力の衰えを自覚し、何となく気持ち重くなる。特に夏以降、体調を崩し、その傾向に拍車がかかる。

このまま老いることな

く心機一転、新しい気持ちで新年を迎えたい。そうだし体調は気持ちの持ち方何とかなる。旅に出よう。今までも、旅は日常生活に新たな力を与えてくれた。老いたからといってそれが変わる訳ではない。

東京にいる娘にそのことを話すと、すぐに開催中の美術展などの資料が



東京のシンボルの一つなのに人は少ない

ンガの丸の内駅舎を連想する人がほとんどではないだろうか。

丸の内中央口を挟んで北口と南口があり、その上には円形ドームがある。新幹線中心の時代となり、赤レンガの丸の内駅舎や二つの円形ドームを見たことがない人は意外に多いかもしれない。

八角形の円形ドームのコーナーには十二支のうち、八つの干支(えと)の彫刻がある。これは東京駅を設計した辰野金吾によるもので、残りの四つの干支は、辰野が手がけた佐賀県の武雄温泉楼内にあるという。

東京駅南口にフロントがある東京ステーションホテルにチェックインし、足の不自由な妻は部屋に残し、娘と二人で皇居を背にして夕暮れの赤レンガの東京駅を眺める。

丸の内中央口の玄関前に「東京駅」と書かれた石碑がある。そこで掲載の写真が、簡単に一人見た。



丸の内南口上の円形ドーム

だけで撮れる。天下の東京駅の象徴であるのに、周囲に人もおらず、何か寂しい気持ちになる。

丸の内駅舎内に入ると家路を急ぐ人々が足早に通り過ぎていく。通勤に利用しているのだから駅を素通りするのは当然のことであるが、何か日本の鉄道の歴史を支え、東京の、いや日本の玄関口である東京駅が軽んじられているように感じる。

そして自分自身もいつも慌ただしく素通りしていたのだ。

それは東京駅だけでなく、これまでの人生のいろんな出会い、出来事も足早に通り過ぎながら老いてしまったこととオーバーラップする。

ややセンチメンタルな気持ちになりながら、老いたからといってまだ人生が終わった訳ではないと思ひ直す。今までのように足早に通り過ぎるのではなく、すべてのものとゆっくり向き合う時間はたつぷりある。これこそ老いの特権なのだ。

旅に出て良かったと思